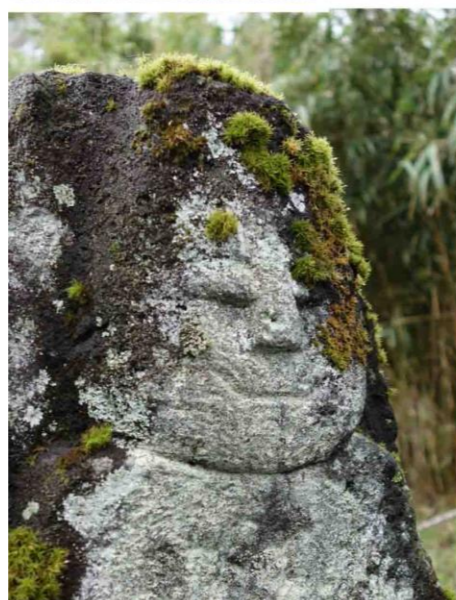




近世墓石を中心とした

桐生市黒保根地区の石造物



調査について

平成26(2014)年から令和3(2021)年にかけて、桐生市黒保根地区における近世の墓石を主な対象とした石造物の調査が行われました。

この調査は市内における歴史資料の把握を目的として、桐生市と立正大学が締結した『立正大学考古学研究室の桐生市内における学術活動に関する協定書』に基づき、立正大学考古学研究室が実施しました。

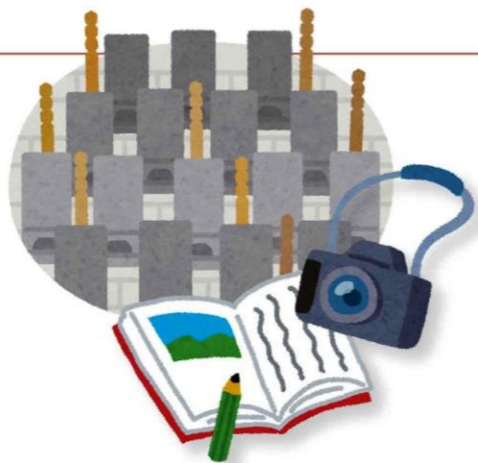
その内容は大きく、①近世墓石の確認調査、②石堂の詳細調査、③石幢の詳細調査の3つとなります。

①近世墓石の確認調査は、調査地点の概要把握のため、黒保根地区全体に残されている墓石を中心とした石造物の種類・形・紀年銘(年号)などの記録を行いました。

その結果、石造物の総数は7036点あり、その内訳は、近世墓石5187基、中世石塔類(板碑4、宝篋印塔部材5、五輪塔部材46)、供養塔・石仏類(庚申塔70、青面金剛8、三界万霊塔3、二十三夜塔3、十二夜塔1、馬頭観音1、念仏供養塔1、経典供養塔4、百番供養塔4、回国供養塔3、その他供養塔4、奪衣婆像3、閻魔像1、道祖神1)、石幢(七面石幢(観音・地藏)1、六面石幢(地藏)7、六面石幢(観音)2)で、その他(石灯籠7、石祠10)、近現代墓1417となりました。使用石材は緑泥片岩製の板碑を除き、全て赤城山に由来する安山岩でした。

②石堂の詳細調査は、①で把握された資料を対象として、実測・銘文判読・拓本(必要に応じて)・写真撮影を実施し、資料の詳細を記録しました。

③石幢の詳細調査は、②と同じ手法に加えて、桐生市内に所在する代表例を対象として三次元計測を実施しました。

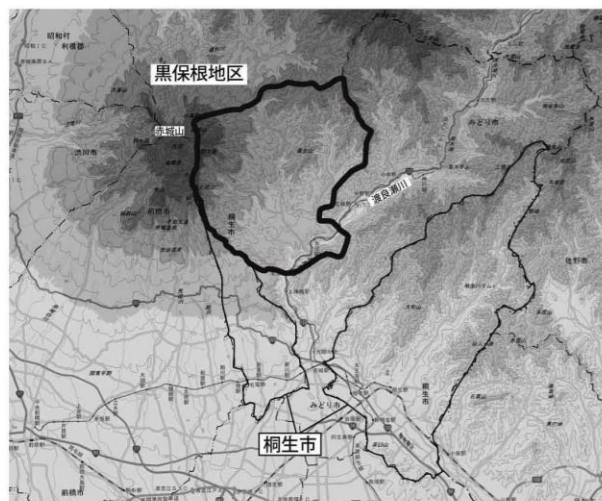


江戸時代の墓石の移り変わり

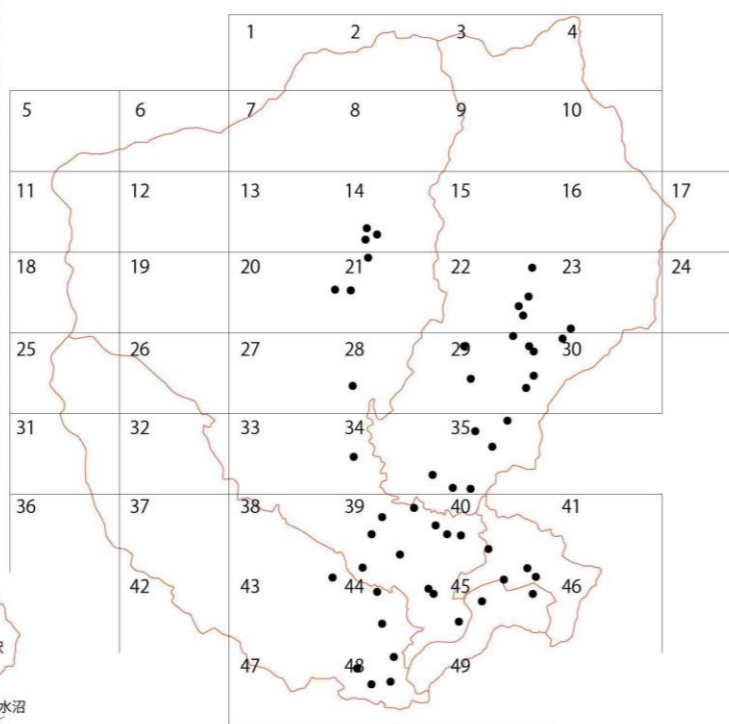
近世墓石は5187基確認されました。墓石の形態は時期によって変化します。地区内では図に示したように、大きく16種類が確認できました。これらのうち、宝篋印塔、五輪塔、石堂、無縫塔は、中世からの伝統的な石塔の形で、多くが近世初期に見られます。その後は、中心となる形態は、おおむね石堂→尖頂舟形→円頂方形類→尖頂方形類・平頂方形類→突頂方形類という変化があります。

次にその年代について見てみましょう。折線グラフは年号が確認できる3923基の推移を示したものです。黒保根地区における近世墓石の造立は、慶長7(1602)年に始まり、寛永期前半(1630年以降)に増え始め、江戸時代中期の元禄期(1688~1704年)頃に急増し、宝永期から安永期にあたる1710年代~1770年代がピークとなっていることがわかりました。その後は徐々に造立数が少なくなります。

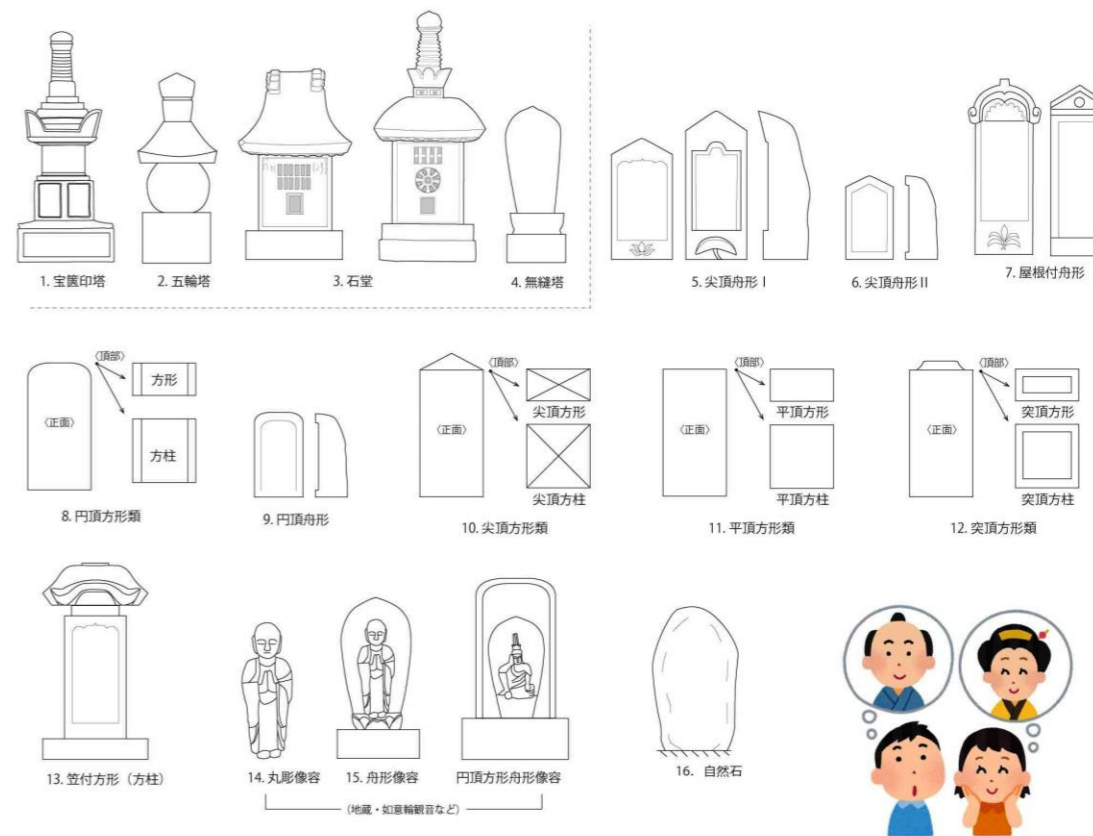
近世初期の石堂は黒保根を含む上野地域に特徴的な石造物ですが、尖頂舟形墓以降の動向は全国に共通します。近世初期は在地有力者や僧侶など特定の人物が墓石を造立し、17世紀後半になり近世社会の安定とともにより広い階層の人々が、個人や夫婦を単位とする墓石を造立するようになります。他地域と比較すると、南関東では幕末以降には墓石1基に多数の人々を回向した家単位の墓石が多くなりますが、黒保根地区ではそうした動向は確認できず、個人単位の墓石が時期を問わず主流となっています。こうしたいわば贅沢ともいえる墓石造立の様相は、黒保根地区の経済力や豊富な石材資源の存在を反映している可能性があります。



桐生市黒保根地区の位置(国土地理院地図に加筆)

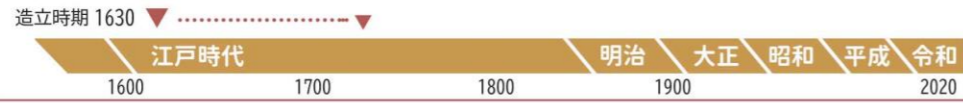


黒保根地区内の地名と調査区・地点



近世墓石・墓塔の種類

石堂



石堂は内部に石仏や塔を安置する寺院建築を模したお堂形の石造物です。その基本的な構造は、下から基礎・身部・屋根の各部材を積み重ねています。大きいもので高さ231cm、小さいもので60cmほどです。内部には石仏や石塔を安置しています。石堂の屋根は方形造り、入母屋造り、寄棟造りといった複数の形があります。また身部の側面に49本の卒塔婆が刻まれるものは「四十九院塔しじゅうくいんとう」とも呼ばれており、弥勒菩薩の住む兜率天とせつてんの内院にある49の宮殿をあらわすものとも考えられています。

今回の調査では黒保根地区内に136基の石堂の存在を確認しました。年代は1630年代をピークとして、1770年代まで続き、その後はまばらになります。造立数は、寛永年間から慶安年間(1624～1651)に特に集中しています。おそらくこの背景には石堂造立を勧める宗教者、それを受け造立した在地の有力者、石堂を製作する石工いしく、といった複数の要因が関連して、集中的な造立がなされたと考えられます。

石堂は誰が何のために造立したのでしょうか。刻まれた銘文をみると、初期のものには「奉造立石堂」(石堂を造立し奉る)という言葉がよくみられ、夫婦や一族が亡くなった人の追善供養、生きている人の生前供養(逆修供養)を目的としていることがわかります。また、農作物の収穫後の祭礼時期にあたる秋季(10月・11月)、彼岸(3月・9月)に多く造立されているため、一般的な故人のための墓石ではなく、様々な供養を目的とした「堂」として造立されたことがわかります。18世紀以降になると亡くなった個人の墓石となり、法名と紀年銘のみを刻むものが造立されるようになります。

他の近世墓石・石造物との関係を見ると、1630年代には黒保根地区の石造物はほぼ石堂で占められるという集中的な造立が確認できます。石堂は近世初期における社会や身分の安定化にともなって、在地有力者がその権力や信仰をかたちとして残したものの一つとみられます。初期の石堂は比較的規模が大きく、仏堂としての性格があります。それが家の墓地に所在していることは、墓地の中心的存在、つまり先祖や家の表象として、継続的な礼拝・供養の対象となったことでしょう。このように石堂は近世における家の成立や家墓の端緒となったものと考えられます。これらの点において、石堂は当地域における重要な歴史資料といえます。



年号 寛永3(1626)年

高さ 133cm

銘文からわかること

法華經千部を読んで供養するための「石堂」

年号 寛永4(1627)年

高さ 115cm

年号 寛永4(1627)年

高さ 136cm

銘文からわかること

法華經千部を読み、夫婦とみられる男女2人の追善供養、子供とみられる男性1人の生前供養(逆修)



年号 寛永7(1630)年

高さ 84cm

銘文からわかること

夫婦とみられる男女2人の追善、施主の逆修供養のための「石堂」



年号 慶安4(1651)年

高さ 120cm

銘文からわかること

「栄長法師」を供養する



年号 寛永2(1625)年

高さ 現存 180cm

銘文からわかること

地藏菩薩を本尊とし楡澤村の住人が造立した



年号 寛永9(1632)年

高さ 155cm

銘文からわかること

「観音堂」として造立



年号 寛永12(1635)年

高さ 231cm

銘文からわかること

赤城山林麻楡澤村の小林隼人が本願主として造立



年号 寛永21(1644)年

高さ 現存 178cm

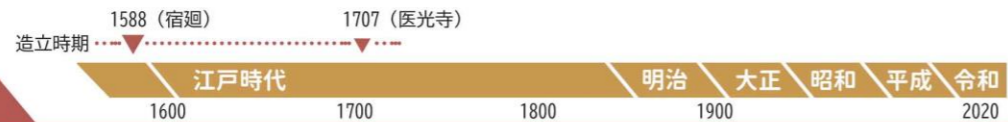
銘文からわかること

尾池氏が本願主として造立した「薬師如来堂」

中に納められています



六地藏石幢



石幢は、一見灯籠に似ていますが、六角や八角に布を垂れる旗（幡）を起源とする多面体の笠塔婆式の石塔です。

柱状の幢身と笠からなる単制のもの、小型の幢身に中台、竿、笠、宝珠ないし相輪を付した重制のものがあります。北関東では平安時代末に石製や木製の単制式が現れ、室町時代以降には六地藏信仰の広まりとともに重制式のもの各地で造立されています。

県下における石幢の造立は南北朝時代・14世紀中葉に始まり、室町時代・15世紀末にピークを迎え、その後減じながらも中世末以降に継続しています。

現在の桐生市域では15基（旧桐生市10、旧新里村4、旧黒保根村1）の所在が報告されており、中世石幢の密集地の一つとなっています。市内所在品はいずれも重制式で、石材は安山岩を用いています。

供養塔としての石幢は、中世の石塔に一般的な個人の追善や逆修供養に加えて、複数の人が集まって一つの石塔を造立する結衆塔の割合が多く、さらに結衆塔のなかでも、庚申供養といった民間信仰によるものが散見されることを特徴としています。

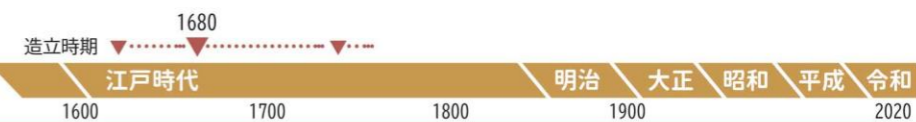
右に示した黒保根地区宿廻の石幢は、松井備後守夫婦と26人が結衆して、天正16(1588)年2月に、庚申供養のために造立した「六地藏大菩薩」であることが、銘文によってわかります。松井備後守は戦国時代の活動した当地域の有力武士の一人と思われます。笠の下の幢身には6体の地藏と、1体の阿弥陀如来像（▼の像）が刻まれています。



スマートフォンで読み取ると石幢の3D画像が見られます



尖頂舟形墓



尖頂舟形墓石とは、頂部が三角形に尖り、背面が荒く加工され、断面が舟底状になっている墓石です。正面には杵を設け法名や没年を刻み、その上部は半円状になっています。下部に蓮の花や葉（蓮座）を彫刻しています。

黒保根地区では1620年代頃からみられはじめ、1640～1730年代の約100年間は、この形の墓石が主流となりました。特に1680年代は造立数がとても多くなります。1740年代以降は墓石の種類も多くなるとともに、尖頂舟形墓石は小型で頂部や蓮座の彫刻が省略されたものへと退化し、やがて消滅します。

この変遷は関東地方でよくみられる傾向ですが、退化までの過程で、黒保根地区では蓮座などの彫刻部分に他地域とは異なる個性がみられます。

また、尖頂舟形墓石に近い形として、変異形の屋根付舟形墓石があります。この墓石の形は、頂部が単なる尖頂ではなく、大振りの唐破風などの屋根構造を彫り出すものです。正面頂部が三角状に整形された「屋形形」と頂部を円くし両端部を跳ね上げた「唐破風形」に分けられます。

どちらも珍しい形で、造立数が少なく時期も明暦・万治年間（1655～1660）に集中しています。

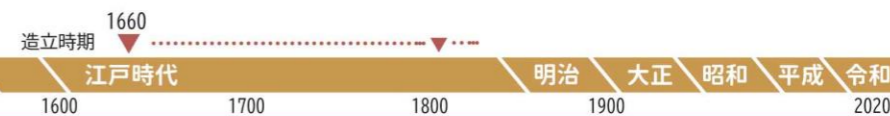


尖頂舟形墓石



屋根付舟形（屋形形）墓石

石仏



石仏の種類としては、黒保根地区では、仏像を丸彫りとするもの、舟形光背に仏像を半肉彫りとするもの、方形の石柱の正面に像容を彫ったものがみられます。

なかには庚申塔のように民間信仰による石仏もありますが、墓地にある石仏の多くは墓石で、子供や女性の墓に用いられています。年代は1660年代から幕末まで継続しており、他の墓石と比べて長期間立てられています。

その1つ1つを見てみると、凛々しい表情や、丸く穏やかな表情など、それぞれに愛着をおぼえます。黒保根地区に活動した石工の特徴なのかもしれません。



